

高崎能樹先生の生涯とその教育活動（その一）

小林 公一

はじめに

高崎能樹先生を存じ上げたのは、令息毅氏を通してでした。高崎毅氏が旧制府立高等学校高等科一年生のとき、私は三年生で、府高YMCA（後に府高聖書研究会と改称）を協力して復興したのがきっかけで知り合い、その後ずっと親しい交りが続きました。毅氏は昭和四八（一九七三）年六月、心筋梗塞で惜しくも急逝されました。五七歳の若さでした。高崎家にはしばしば訪れ、昭和一六年には能樹先生の牧する阿佐谷東教会の

会員となり能樹・あい御夫妻には私どもの結婚式の仲人をお願いするといった間柄だったので。

能樹先生のことを書くようにとの御依頼を受け、鋭意資料を集めました。必ずしも充分でないのですが、解った範囲内で一応まとめようと致します。

一、経歴

高崎能樹先生は明治一七（一八八四）年鹿兒島県に生れ、上京して独協中学に入学します。その頃は硬派の不良で、短刀を

忍ばせてよく喧嘩を吹っかけたそうです。河村君というクリスチャン・ホーム出身の同級生が居り、同氏の妹さんの祈りによって回心してキリスト教信者となったそうです。その後明治学院神学部に進学します。渡辺善太氏（銀座教会名誉牧師）とは独協中学、明治学院を通しての友人です。明治学院神学部を明治四三（一九一〇）年卒業、同年曰杵教会を、大正元（一九一二年）年には佐賀教会を、大正三（一九一四）年には福岡教会を、大正六（一九一七）年には東京の赤坂教会を牧会し、大正一一（一九二二）年一〇月から、旧日本基督教会日曜学校局長事に就任し、大正一四（一九二五）年九月に及びます。

この間、小学校教師の経験もあり、女兒の虱をとってあげたという逸話も残っています。新聞社に勤務したこともありま

す。姉の家に住んだこともあり、植村正久牧師宅に同居したこともありま

す。植村牧師が富士見町教会を牧していた関係もあり、高崎先生は同教会の日曜学校小学科低学年の教師を勤め、同日曜学校の幼稚科の教師であったアルウィン・ペラ氏と教育論で論争したこともあるそうです。

大正一〇（一九二二）年九月より青山学院神学部講師並に教授として、児童心理、宗教教育等の講座を担当し、昭和七（一九三二）年三月までに及びます。大正一三（一九二四）年一月

より日本基督教会児童館長（上野マリア館館長）に就任し、関東大震災（大正一二・九・一）で罹災した幼少年の救護に努め、バラック児童の宗教教育と天幕伝道に従事します。大正一四（一九二五）年三月、バラックは撤退され、マリア館閉鎖とともに任務を終了し、児童館長を辞任、中野区東中野に日本基督東中野伝道所を設置し、教育的伝道を開始します。大正一四（一九二五）年七月、杉並区阿佐谷小山六七に移住し、同年一〇月、阿佐谷幼稚園を阿佐谷五丁目三〇番地に設立して開園、園長となり幼児教育に努めると同時に日曜学校を開始します。

昭和二（一九二七）年三月、大人の礼拝集会を開始します。

昭和三（一九二八）年、『子供の教養』誌（月刊）を発刊します。これは昭和一六（一九四一）年末まで続きますが、戦争のため暫く休刊となり、戦後昭和二一（一九四六）年三月再刊され、昭和二八（一九五三）年まで続きます。

昭和四（一九二九）年一月、日本基督阿佐谷伝道教会建設式が挙行され、昭和九（一九三四）年六月、日本基督阿佐谷教会に牧師として招聘され、同七月独立教会となります。昭和一〇（一九三五）年一〇月、阿佐谷幼稚園園舎（現在の）が落成、昭和一一（一九三六）年一〇月、阿佐谷母の学校を設立し、母性の再教育に努めました。昭和二一（一九四六）年四月、阿佐

谷東教会牧師を辞任、名誉牧師として昭和三三（一九五八）年二月まで奉仕。昭和二八（一九五三）年十一月、阿佐谷幼稚園舎及び同敷地四八〇・五五坪を日本基督教団阿佐谷東教会に寄贈。昭和三三（一九五八）年二月、狭心症にて逝去。昭和三四（一九五九）年十一月、高崎能樹宅地跡に阿佐谷東教会会堂を建設、献堂式が挙行されました。

二、教育活動

右に記しました経歴で明らか通り、高崎能樹先生は神学校を卒業後、牧師として大人の牧会活動にも従事されましたが、その主精力を子どものために注ぎます。日曜学校局の主事として子どものための教育的伝道に尽しますが、これは、上野マリア館館長に就任したことによって一層強められました。またそれが、日曜学校の延長として、幼稚園に力を注ぐことになりました。阿佐谷幼稚園を開園して自ら園長となり、基督教保育連盟への指導的役割を果たしたこともその現れです。後にも触れますが、先生の保育理論は、心理学がその一つの基礎となっています。義兄の心理学者上野陽一氏の影響も考えられます。講演に、執筆活動に、教育に、八面六臂の活躍を先生はされました。

が、そのモットーは、子どもの純潔と家庭の聖化という点にありました。「家庭の祭壇化」ということを絶えず強調しました。先生は多くの著作も残されましたが、以下、入手できた著作の主なものを年代順に跡づけてみることにしましょう。

『基督をめあてに』（一九二〇年、警醒社）は、「福面新報」の少年少女欄に掲載したものを増補、訂正したもので、これには、教話が二五、お伽話が五つ収められています。教話の中には、「豚飼の豆莢^が」という題で、聖書に出てくる「放蕩息子」の譬話が扱われています。また、「お人形」という題で、旧約聖書創世記一章二七節に記されている「神の像」の問題が扱われています。「福は内鬼は外」という題の教話は、人が酒に呑まれないように、克己や忍耐の必要を説いています。「附録」の中に、「生命の水」という題の話が載っていますが、これは、天国についての話です。

『信仰の友』臨時増刊号（一九二〇年二月、信仰の友社）という小冊子の中に、高崎花童というペン・ネームで「天国のお蔵」という話を載せています。

『子供に聞かせたいお話』（一九二三年、揺籃社）の中には、童話、寓話、実話、詩、理科の話、伝説、創作が集められています。

『子供の心』（一九二四年、新生堂）は著者が各地各所で見聞した事実を書き集め、子どもを具体的に解明しています。

その中には、飲酒や喫煙の害についても触れています。

『子供の教養』（月刊誌）は、昭和三（一九二八）年に発刊され、昭和一六（一九四一）年末まで続きましたが、戦争のため、雑誌統合令によって『国民保育』に統合されました。その後、『国民保育』誌も廃刊となります。戦後『子供の教養』は復刊され、昭和二一（一九四六）年三月から再発刊され、昭和二八（一九五三）年に及びます。高崎能樹先生を中心に、先生のお宅におかれた子供の教養社から出されました。

「顧問」として、赤井米吉、上野陽一、岡部弥太郎、倉橋惣三、斎藤文雄、田中幸一、田中寛一、西村真琴といった幼児教育関係の各界の錚々たる人々が名を連ね、「同人」には、伊福部敬子、牛島義友、加藤常吉、栗山重、後藤岩男、小見山栄一、鈴木清、山下俊郎、吉田源治郎、広瀬ハマコ、長谷川初音という保育関係の指導者たちが挙げられ、「編輯局員」として、上沢謙二、佐藤瑞彦、中島義四郎、長島貞夫、高崎能樹、高崎毅の名が記されていて、これら保育関係の第一線で活躍している人たちによって誌面が飾られています。

この『子供の教養』誌が最も強調したことは、家庭の祭壇化

と、母性の再教育ということです。

同誌昭和二三（一九四七）年六月号に、「育児十則」が載っています。それは次に記す通りです。

- 1、子供は神の子お国の宝。（この子供観がはつきりせねば本當の教育は出来ません）
- 2、軽く思ふな子供の将来。（子供の五十年の将来を静かに幻に描いて見て下さい）
- 3、知識教育よりも性格教育。（自信をもち楽観的に努力して進む生活態度を躱けることが大切であります）
- 4、強くやさしく聖く育てよ。（自律性と社会性と宗教性を教養することに努めて下さい）
- 5、長所を伸ばして、短所は捨て置け。（長所さへ伸ばせば短所は自然に被はれてしまひます）
- 6、怒るな、叱るな、賞め過ぎるな。（親は自分の感情を抑制して、子供に真実を表はさねばなりません）
- 7、体も心もよく動くやうに。（無精な躱げが子供の能力を停滞させます）
- 8、規則正しい生活指導がかんじん。（家庭生活に規律を設けて徹底して下さい）
- 9、腹八分目に何でも食べる習慣をつけよ。（偏食は大禁物、

大食は不良化の基)

10、子供は風の子光の子。(日光浴と空気浴とを奨励して下さ

る)

これは恐らく高崎能樹先生が書かれたものと思います。

『幼児に聴かせる聖書のお話の取扱ひ方』(一九三五年、基督
教保育聯盟関東部会)

これは、同じ題目で、一九五四年、草美社からも出版されて
います。表現の多少の差異は見られますが、内容は全く同じで
す。

内容は、「旧約聖書のお話」と「イエス様のお話」とから成
り立っています。従って、新約聖書は四福音書(マタイ・マル
コ・ルカ・ヨハネによる福音書)だけが取り扱われており、パ
ウロ書簡その他には全然触れていません。

冒頭、幼児の宗教心は「神秘心」と「感謝心」と「信頼心」
の三つが著しく働くので、この方面の教養に主力を注がねばな
らぬ、と記されています。従って聖書に示されている(1)神の驚
くべき力、(2)神の造り給える万物の不思議、(3)神の守護、(4)神
の愛、などを教材とすることが最も適当で、その教訓の主眼点
をここに結びつけることがよいとされ、更に、この教訓を童話

(風にわかり易く語るがよい、と主張しています。

また、幼児時代の罪の意識は「禁じられた事を犯すことが
罪」というのが主要点であるから、それをよく心得てかからぬ
ばならぬ、とし、それで不義不徳の問題よりも不信仰と神の命
令に従わぬことが誤りであることを説き示すべきである。結局
神様にさえ従っておれば大丈夫であり、安心であることを教訓
の主眼点とする、と説いています。

更に、旧約聖書には、不道徳な記事を遠慮なく記載してある
が、幼児に語るときは省いてよい、と指導しています。

イエスの話に関しては、キリストに対し神秘と感謝と信頼と
を向けさせることが大切な要点である、とし、(1)キリストの愛
の働き、(2)キリストの守護、(3)キリストの救助、(4)キリストの
偉い権威、及び「幼児としてのキリスト」を紹介して共感させ
る必要がある、と主張しています。

また、残忍な物語は幼児に禁物であるが、苦心してどの程度
まで語り得るかを多年試みた結果を掲載することにした。危険
を感じられるお方はやめて頂きたい、と述べています。

旧約聖書のお話は、創世記からヨナ書までを選び、人物の行
動を中心に、主題、教訓、要領、注意という順序で、要点を簡
明に記しています。その中から幾つかの気付いた点を述べてみ

ましよう。

「カイン爺さんのお話」の場合、残忍な弟殺しの状況はすらりと簡単に語って、さんげの心を認めるように語ることが大切である、という注意がなされ、兄弟仲よくせよ、という教訓にもってゆくよう取り扱うべきであるとする指導がなされています。

「ノアの爺さんの話」は、神様のお言付のままにすることが目指され、童話風に興味深く語るがよい、という指導がなされています。

「バベルの塔のお話」は、塔が高くなればなる程自分たちの仕事がかえって困窮したが、それに反して、天は更に高く高く仰がれることを童話風に物語るべきである、として、神様には勝てぬ、ことを教えるのが目的とされています。

「イエス様のお話」の中で、「難をのがれてエジプトへ」(マタイによる福音書二ノ一三——二三)の個所で、小児が殺害されたことは省くがよい。ただヘロデ王がイエス様を見つけようとするためと説明してよい、と注釈が付けられています。

「善きサマリヤ人」(ルカによる福音書一〇ノ二五——三七)の話に就いては、劇的に語ると面白いが、強盗の有様は簡単に説明すべきである、という指導が為されています。

「目あきになった乞食」(ヨハネによる福音書九ノ一——四〇)の個所では、目に泥をぬったことは語らぬがよい。これはまねする心配があるからである。他は聖書通り、という指導が為されています。

「賢い乙女と愚かな乙女」(マタイによる福音書二五ノ一——一三)に就いては、婚礼の時の習慣を語り、五人の賢き乙女のごとく油断せぬようにすすめる、と注釈づけられています。

「別れの晩さん」(ルカによる福音書二二ノ一——三四)ここでは、晩さんの様子と弟子たちの上位争いを戒しめ給うたことを語る、とされています。

「十字架と復活」(ヨハネによる福音書一九ノ一七——二〇ノ三〇)の個所では、十字架につけられ給うたことは簡単に語り、復活の喜びを強く語って終る、という指導が為されています。

〓 つづく 〓
(青山学院大学)

